

2017年度（第14期）事業報告書

（2017年4月1日から2018年3月31日まで）

特定非営利活動法人アーシャ＝アジアの農民と歩む会

報告者 プロジェクト統括責任者 三浦 照男

はじめに

インド・ウッタラプラデシュ州アラハバード県にあるサムヒギンボトム農工科学大学マキノスクールを中心に、本会が国際協力活動を行って14年目になる。その間、たくさんの貴重な経験、知識を得ることができた。同時に、異文化での活動の難しさを改めて身に知らされた一年であったが、アーシャスタッフ、現地スタッフの協力の下、事業を継続できたこと感謝をしたい。

2017年度の事業、特にリーダー育成、貧困家庭の子どもの教育、農村の栄養・母子保健改善、そして、有機農業組合活動と所得向上はおおよそ計画どおりに実施することができた。これは国内外からの継続的な協力、および計画にあった収入源である JICA の受託事業資金、助成金、アーシャからの支援金、寄付金が確保できたこと、また、会員の皆様、国内、海外の事務所スタッフ及びインターンスタッフが尽力してくださったことに他ならない。しかしながら、JICA 受託事業、母子保健事業が2017年12月で終了したことを受け、各事業の持続可能な活動方法について、再考する必要性に迫られている。2017年度中盤から、より自立的な活動を継続するために、事業収入確保の強化、現地人スタッフ及び事業関連リーダーの経営能力の向上に力を入れた。

2017年度の特筆すべき事柄としては、インドに長期滞在する日本人や留学生、NGO 関係者、ビジネス関連業者の方々が、アラハバードの事業に関心を持つようになってきたということである。マキノスクールを訪問、滞在する方々が増加している。特に、有機農業、組合活動、キノコ栽培、農産物販売、農村教育、農村栄養等について研修を希望し、実践される方が多くなってきた。これは、アーシャやアラハバード関連事業がより広くインド国内外で知れ渡ってきている証であり、会員数は増えないまでも、協力者は多くなっている。実際、その多くの方がアラハバード事業を支援するために募金活動を行ったり、AOAC や AVS の商品を紹介してくださったりしている。これは現地で事業を展開する上で大きな励みになっている。感謝である。

I. 特定非営利活動に係る事業

1. 農村開発・農業開発支援事業

持続可能な農業・農村開発・収入向上事業

1-1 貧困農民のための収入向上活動事業

有機野菜、日本米、キノコ、加工食品(特に、味噌、醤油、食肉加工品、漬物、乾燥キノコ、乾燥モリンガ及び岩塩加工)の質の向上と販路拡大のための協力を行った。今まで、アラハバード

有機農業組合が培ってきた販売先に加え、全日空、日本食材販売会社との取引が多くなった。また、日本米の他に味噌、醤油の消費量も増えてきている。一方で、精米歩留まりが現在40%前後なので、その精度を高めるための技術指導も必要となっている。

前年度、前組合長の横領事件があり、その後、専門の会計士を入れ、複数の者が会計に携わり、毎月の会計状況のチェックをするように指導している。

1-2 若い人材の育成と総合的な農村開発の推進

インドの農村リーダー育成の一環として、2017年10月に北東インド・ミゾラム州より4名、また、2018年2月に日本のNGO・わびねす、および地球の友と歩む会のスタッフ3名のために、有機農業とキノコ栽培の研修を行った。この他、アラハバードの農民、大学生、小規模事業者等キノコ栽培研修希望者8名が早朝からの農場研修に参加している。サムヒギンボトム農工科学大学の学生がマキノスクールの有機農業、およびキノコ栽培に興味を持ってきている現れである。

1-3 アーシャ農村学校及び持続可能な農村開発研修センターの効果的な活用

現在、マキノスクールが管理する農村開発センターは4か所ある。マエダ村センターはアーシャ学校3校月例合同職員会議、有機農業組合の会議等に使用、またハルディー村センター及びカンジャサ村センターは約6ヵ月間の農村女性のための裁縫教室に使用されている。バルゴナセンターは、米の倉庫として、また、マキノスクール学生の農村調査における滞在場所に使われた。使用頻度としては、マエダ村センターを除いては、十分に活用されているとは言えない。今後、計画の中で検討する余地がある。

2. 人材育成支援事業

2-1. 持続可能な農業・農村開発コース(SCSAD)運営支援および研修所の環境向上

今年度は、インド人3名(内女性1名)、日本人男女2名、合計5名が入学し、3月20日に全員卒業した。メガラヤ州からの男子学生、デニスは聾啞のためコミュニケーションに支障をきたしたが、入学から3ヵ月程、朝の集会直後、皆で手話を学び意思疎通を図ることに努力した。10月のデリー、ウツタルカンド州への研修旅行中、胆石のため急遽帰宅させ、2ヵ月程自宅療養したが、1月初旬に帰校し、全過程を終え無事卒業した。上記のこと以外、大過なく研修を修了できたことは感謝である。

2-2. 僻地農村学校の自立運営に向けた総合的教育支援事業

(1) アーシャ学校(3村、3校・児童600名)の運営と教育改善のための支援

児童に対する保健教育を中心に、環境教育、農業教育、美術教育などを特別学習プログラムとして支援した。10月に特別学習プログラムを男女2グループ、それぞれ10月5~7日に女子、10月26~28日に男子を5学年と6学年、各30名に分け、継続教育学部のセンターで2泊3日の宿泊学習の実施を支援した。宿泊学習においては、自然環境と有機農業、虫とその生態、農業、栄養と健康調理、石鹸づくり等、学校ではできない経験ができるように配慮したカリキュ

ラムであった。この他に、絵画教室、総合学力試験、アーシャ学校運動会、アーシャ学校祭の実施をするための、支援と助言活動を行った。数年前から、上記の学校イベントにおいて、各学校の教師が主体的になって立案、計画、実施ができるように指導している。

(2) アーシャ学校教師の研修支援

8月25～27日、アーシャ学校教師の資質向上のための研修プログラムを実施した。主に、特別教育キャンプの授業を教師が率先してできるようにするための訓練として行った。

(3) アーシャ学校の基盤整備支援

2017年度は校舎の屋根、床等の修理改善の必要がなかったため、これは実施しなかった。

(4) アーシャ学校の生徒に対する奨学金寄与

アーシャ学校の授業料は他の私立学校に比べ低く設定されているので、教師の給与は最低賃金よりも低い。その為、2017年度も生徒1人当たり25ルピー(50円)を奨学金として供与した。この奨学金の7割は教師の給与に充てられている。

(5) アーシャ学校建設の募金

2017年度において、アーシャ学校マイダ校新築のために100万円の募金を行う計画であったが、日本キリスト教団がクリスマス献金を募ってくださるとのことであったので、その結果を待つことにした。

2-3. 裁縫学校の運営支援、裁縫によるフェアトレード製品の開発支援

農村女性の収入向上のための支援事業として、4月3日より7月22日まで、また、2回目は7月31日から11月2日まで、裁縫基礎教室をハルディ村とカンジャサ村センターで実施した。参加者は総勢130名であった。また、基礎コース修了者で試験に合格した者を対象に7月31日から11月2日まで同センターにおいて上級コースの裁縫教室を実施した。更に上級コース修了者で、技術的、人格的に優秀な修了者8名に対し、手工芸品研修を11月6日から2月22日まで実施した。これらの事業の裁縫教師はマキノスクールが育成した農村女性たちである。技術的な向上、そして日本から来てくださる竹内あさみ氏がデザインの指導をしてくださった効果もあり、彼女たちが制作するバック等の手工芸品はクォリティが向上し、徐々に売り上げを増している。

2-4. 農村保健衛生改善支援事業

2017年度12月で、JICAからの受託事業として行っていた母子保健事業は無事終了した。11月末に実施した最終評価会にはアラハバード県ジャスラ郡とシャンカルガル郡の保健所長、そして日本からはJICA筑波から担当者の林将幸氏、母乳育児専門家の奥起久子氏(小児科医)、健康栄養専門家の奥村昌子氏(大学准教授)が参加してくださった。活動発表は農村保健ボランティア(以下VHV)のリーダー達が行い、それに対して専門家がコメントと世界の母子保健、栄養に関する講義を担当した。

5年間の当事業の成果は受託者であるJICAの担当者に十分納得できるものであった。アラハバード県の2つの郡、人口約40万人が住む地域において、事業期間中に育成された農村保健ボランティア(VHV)は約100人であり、適切な母乳育児と補完食の支援、定期体重測定による早期の

栄養不良の発見、緑黄色野菜によるバランス栄養とそのため家庭菜園づくり等の活動を推進した。この活動によって、農村女性が自信を深め、農村改善に自発的に関わってきた事実は他の村人に多大なプラス効果を与えている。追跡調査によると、組織としてのボランティア活動を辞めてからも、その多くは、自主的に家族や近隣の女性に母乳育児などについてアドバイスをしていたのである。

また、5年間の活動の結晶として、英語、日本語、ヒンディー語3か国語版、フルカラーの「モリंगाと緑葉野菜レシピブック」1000冊を発刊するに至った。このレシピブックは、VHVはじめ、アラハバード県の保健関係者、JICA インド事務所、サムヒギンボトム農工科学大学関係者などに配布、国内では、JICA 筑波、栃木県国際交流協会、支援者のみなさま、モリंगा葉パウダーの購入者にプレゼントとして配布を開始した。

JICA 母子保健事業を通して、VHV が組織され、彼女たちの参加によって農村が改善されることは持続可能な開発という観点から非常に有意義であった。よって、彼女たちが継続的にまた組織的に活動することは農村の社会資本の蓄積になるのである。上記の観点にたって、2017年5月にVHV が中心になり現地のNGO アーシャ ビカス セワ サミティ（アーシャ開発奉仕協会 AVSS）を設立し、現在、自主財源を確保するために、モリंगा葉乾燥パウダー、岩塩の加工等を行っている。また、会員の中には自主的に母子保健活動を続けている者も多い。本会として今後の AVSS の自立支援方法を模索している状況である。

また、創価大学の学生グループ「ヘルスお届け隊」がアラハバードの農村女性や子どもの貧血予防のために、「レディーフォー」で寄付を募り、鉄ナス 1000 個分の寄贈を受けた。運送途中、素材が鉄であり、さらに、容量も多かったことにより、デリー空港で検査料や関税を請求され、情報収取や業者との連絡がスムーズにいかず、書類のやりとりで時間がかかり、倉庫保管料や罰金が多くかかったため、「レディーフォー」の寄付金では不足が生じ、アラハバード訪問中の専門家等の寄付金で支払い、1ヵ月半遅れて現地にて受け取ることができた。その後、農村保健ボランティアにより活動村で300人分を配布したが、資金不足により配布を一旦休止している。

3. 事業を推進するための調査研究及び、啓発・広報事業

3-1. ワークキャンプ・スタディーツアー開催、訪問者受入

スタディーツアー開催(アーシャ・公益社団法人全国愛農会・インド三浦後援会・継続教育学部 共催)

- 2017年9月12～17日、東京農業大学アジア・アフリカ研究会の学生8名のインド研修を受け入れた。アーシャ活動の視察、マキノスクールの学生、組合スタッフと一緒に働くことによる農村・農業開発についての学びを提供した。
- 2018年3月4日から13日まで、マキノスクールが企画（株式会社マイチケット主催）した

インドスタディーをアラハバード中心に行った。参加者は中西理事を含め4名であった。当初計画より少人数となった。今後、応募、宣伝の方法等を再考する必要がある。

3-2. 会報の発行

アーシャの活動及び、マキノスクールのプロジェクトの活動を会員、支援者に理解していただくために年4回アーシャの機関紙『アーシャ』を発行した。

3-3. ホームページ等での広報

アーシャの活動内容を広く一般の方々に知っていただくために、佐藤耕土理事によるホームページの更新が行われた。

また、JANIC (NPO 国際協力 NGO センター) による ASC2012 (アカウントビリティ セルフチェック 2012) を 2017 年 12 月 18 日実施した。 <http://www.janic.org/asc2012list/>

さらに、Facebook でアーシャの活動内容の写真を度々アップロードすることで、当会の活動情報をオンタイムで広報することができた。しかしながら、会員増強を得るまでに至っていないので、更なる努力が必要とされる。

3-4. 日本国内における学生・市民のためのセミナー及び講演の企画、主催、参加

2017 年度に行ったセミナー、講演、報告会の時期と場所については以下の通りである。

- 4月14日 仙台市イズミティ21にて「VHVによる緊急支援活動報告」報告者：代表理事
- 4月27日 生協総合研究所にてアジア生協協力基金成果報告会 報告者：代表理事
- 6月4日 鶴川教会にてインドプロジェクト報告会 報告者：副代表理事
- 6月5日 とわの森三愛高校にてインドプロジェクト報告会 報告者：副代表理事
- 6月6日 酪農学園大学にてインドプロジェクト報告会 報告者：副代表理事
- 6月11日 荘内教会及び荘内教会保育園において報告会 報告者：副代表理事
- 6月18日 田園調布教会にてインドプロジェクト報告会 報告者：副代表理事
- 10月26日 那須塩原市にて若い母親など対象に報告会 報告者：代表理事

3-5. 次期事業形成調査

三浦副代表が次期 JPP 事業のために、関係者及び JICA 筑波の担当者と接触し、2017 年 6 月に申請書を提出したが、不採用となった。

4. 災害や紛争などによる被災住民への緊急支援事業

今期は災害や紛争など発生しなかったため、行われなかった。

II. その他の事業

1. バザー・チャリティ・販売事業

栃木県内を中心に、東京都(田園調布教会、鶴川教会)、地域のバザー或いはマルシェ等に出店し、当会の活動の認知度向上、AVS・AOAC商品の広報・販売を行った。今年度は主にAVS新商品開発に力を入れ、県内外へも広報活動を進めた。2013年度より開始した収入向上支援、調査、新製品開発収入向上事業推進のためのマーケット開発、販売、広報活動を継続した。

国内事務局が日本国内販売を担当し、三浦代表理事、大浦理事、中西理事がバザー出店販売等に参加した。また、現地派遣スタッフ平野および川口はアラハバード有機農業組合の製品の販売促進と同時にインドでのAVSのマーケット開発を行った。上記の活動で、AVSやモリンガ製品のインドでの認知度は高まった。

国内スタッフは、収入向上支援のためアラハバードで生産された岩塩、モリンガ(ワサビの木)葉のパウダー及び農村女性が作った手工芸品の販売支援を行った。本会、国内外の販売努力により、徐々にではあるが、売上げ成績は伸びている。

2. 演奏会、展示会、図書出版等の文化事業

今期、上記の活動は行われなかった。

III. その他

2017年度の人事は以下のように行った。

(1) アーシャスタッフ及び役割

- ①三浦 照男：プロジェクト総責任者。
- ②川口 景子：2013年7月より、1年毎の契約でインドに派遣中。現地常駐スタッフとしてプロジェクト形成、インドプロジェクト総務及び会計主任。奨学金担当理事。
- ③林 神志郎：2016年7月より2年間の契約でインドに派遣中。現地調査、研修事業、プロジェクト形成、学部長補佐等。2018年3月31日契約は終了した。
- ④平野 伸吾：2016年7月よりインターンとして2年間の契約で現地派遣中。
主に、マーケティング開発(AVS製品を含む)、食品加工、及び会計補佐。
- ⑤三浦 孝子(母子保健専門家)：インドに短期派遣、技術指導、助言活動。(8～9月、11～12月)、国内事業アーシャ総責任者。
- ⑥會田 るり子(国内事務局)：会員管理、収入向上事業、マーケティング、収益事業。
2018年2月28日に退職。

⑦漆原 雅子(国内事務局)：総務事務、会計。2018年3月31日退職。

派遣されたスタッフ、専門家は、それらの活動の成果を、日本において市民向けのセミナーや講演会などを通じて、開発教育、市民教育、国際協力等の活動に活用する。本会の運営を強化するために、会員の募集、支援金の確保に努める。

(2) アーシャ理事及び役割

- ①山下 逸喜：広報、CSR、国内外マーケティング。
- ②中西 泉：インドスタディーツアー企画、アーシャ手工芸品販売近畿担当。
- ③大浦 智子：イベント、アーシャ手工芸品販売栃木担当。
- ④佐藤 耕士：広報、HP更新、イベント、アーシャ手工芸品販売福島担当。
- ⑤高丸 和彦：研修受け入れ、イベント、アーシャ手工芸品販売九州担当。
- ⑥石原 潔：研修受け入れ、イベント、アーシャ手工芸品販売中部担当。
- ⑦町上 貴也：広報、イベント、アーシャ手工芸品販売名古屋担当。
- ⑧川口 景子：海外事務局、農村女性とアーシャ学校のための奨学金及び募金担当。
- ⑨三浦 照男：新プロジェクト形成、インドプロジェクト監督。
- ⑩三浦 孝子：国内事務局、アーシャ組織運営。収入向上事業販売担当。
- ⑪及川 洋征：海外プロジェクト形成。
- ⑫村上 健：広報、リクルートメント。

IV. 事業の実施に関する事項

(1) 特定非営利活動に係る事業

事業名	事業内容	実施日時	実施場所	従事者人数	受益対象者の範囲及び人数	事業費の金額(千円)
1. 農村開発・農業開発支援事業	持続可能な農業・農村開発・収入向上事業	通年	インド・アラハバード地区	3名	インド・アラハバード地区30万人の農村住民	466
2. 人材育成支援事業	①持続可能な農業・農村開発コース(SCSAD)運営支援および研修所の環境向上	通年	インド・アラハバード地区	3名	学生5名および研修生の活動地(インドメガラヤ州、U.P.州、日本)の農村住民各1,000名	5
	②僻地農村学校の自立運営に向けた総合的教育支援事業	通年	インド・アラハバード地区	2名	インド・アラハバード地区 550名	625
	③裁縫学校の新規開設・運営支援、裁縫によるフェアトレード製品の開発支援	通年	インド・アラハバード地区	2名	インド・アラハバード地区 1,000名	1,213
	④健康栄養・農村母子保健の事業支援	通年	インド・アラハバード地区	4名	インド・アラハバード地区 60万人の農村住民	16,574
3. 事業を推進するための調査研究及び、啓発・広報事業	①ワークキャンプの開催・研修ツアー(2回)・訪問者受入	随時	日本	7名	日本国内 300名	412
	②会報の発行	年4回	日本・インド・米国	7名	日本国内、インド・米国 述べ約1000名	69
	③次期事業形成調査	随時	日本・インド	2名	日本、インド	287
4. 災害や紛争などによる被災住民への緊急支援事業	緊急支援活動事業	随時	日本・インド	0名	日本国内	0
						19,651

(2) その他の事業

事業名	事業内容	実施日時	実施場所	従事者の人数	事業費の金額(千円)
1. バザー・チャリティ・販売事業	バザー出店、収入向上支援、調査、販売、新製品開発	随時	日本・インド	7名	210
2. 演奏会、展示会、図書出版等の文化事業	絵画展実施	随時	日本	3名	0